

## 婚姻上の地位とディストレス

大日義晴（西武文理大学）

### 1. 問題の所在と目的

本報告の目的は、婚姻上の地位とディストレスとの関連を検証することをとおして、現代日本における結婚の社会的文脈を析出することである。

大日・菅野（2016）は、われわれの社会において、困ったときに最も頼りにされているのは、男女ともに配偶者であること、ゆえにわれわれの社会は、困りごとがあるときは配偶者に頼ることが規範化されている社会であることを指摘している。しかし未婚化の進展によって、誰もが結婚する「皆婚社会」から、必ずしも誰もが結婚するわけではない社会へと姿を変えつつある。このような変化によって、われわれの社会における結婚や配偶者の位置づけは、今後どのように変化していくのだろうか。具体的には、配偶者に依存的な構造を保持したまま、有配偶者と無配偶者の社会的分断が拡大していくのだろうか。それとも、結婚への参入についての社会規範から個人が自由になっていくことを通じて、結婚や配偶者のもつ重要性が相対的に小さくなっていくのだろうか。

これらの関心に基づき、本報告では、婚姻上の地位とディストレスとの関連について、ソーシャル・サポートの効果を踏まえて検証をおこなう。具体的には、まず婚姻上の地位がディストレスに与える効果について確認する。その上で、1) 配偶者のサポートが利用できる場合に、結婚の心理的メリットを見いだしうるのか。2) 非配偶者のサポートが利用可能であれば、未婚であっても有配偶者と同程度の心理的安寧がもたらされるのか。3) 有配偶者にとって、配偶者のサポートが利用できなくても、非配偶者のサポートが利用可能であれば代替できるのか、について検討を行う。

### 2. データと方法

使用するデータは「全国家族調査（National Family Research of Japan: NFRJ）」のうち、NFRJ98、NFRJ03、NFRJ08、NFRJ18 である。前半の分析ではすべての年齢層（28歳～72歳以下）を使用し、後半の分析では成人前中期（28歳～49歳）に限定して分析をおこなう。

本報告では、従属変数としてディストレス（CES-D 尺度項目を使用）を用いる。婚姻上の地位については、初婚継続、再婚（離死別有配偶）、離別無配偶、死別無配偶、未婚の5カテゴリーを最も細かい分類とし、分析によって複数のカテゴリーを統合して使用している。主要な変数であるソーシャル・サポートについては、相談サポート（「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」という項目で測定される）の利用可能性の項目を用いる。

### 3. 分析結果と考察

まず、初婚継続男性と未婚男性のディストレスを比べると、一貫して両者の間に差があり、後者の方が高い。離別無配偶男性のディストレスについても、初婚継続男性に比べて高いが、2019年においては両者の間に差が見られなかった。一方、初婚継続女性と未婚女性のディストレスを比べると、1999・2004年においては両者の間に差が見られなかったが、2009・2019年においては後者の方がより高いディストレスを示していた。以上から、男女とも概して有配偶者は無配偶者よりもディストレスが低いこと、また、以前は結婚から得られる心理的メリットは女性よりも男性に大きいと言えたが、近年その性差は縮小しつつあることが確認された。

また、婚姻上の地位がディストレスに与える効果は、地位それ自体ではなく、配偶者のサポートが利用可能であることの意味が大きいことが示唆された。配偶者のサポートは、その他の社会関係から得られるサポートに比べてディストレスに与える影響が大きく、代替することが難しい。かつ有配偶者が配偶者のサポートを得られないことは、ディストレスを高める。以上から、配偶者によるサポート提供はわれわれの社会において強く規範化されており、結婚や配偶者の持つ重要性が大きくゆらいでいないと解釈できる。

（キーワード：ディストレス、婚姻上の地位、ソーシャル・サポート）